Q 小さな政府なぜ目指す

A 民間に任せる選択肢も

鎌田　忍　議員（新志会）

Q1

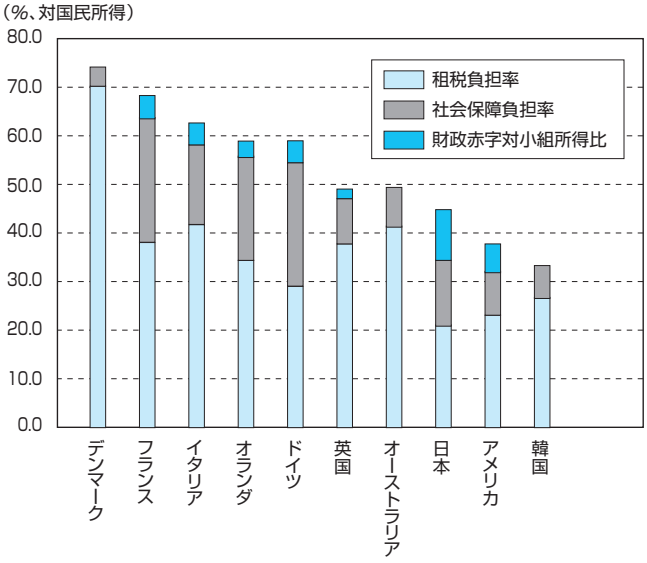
村長は、「小さくて優れた組織」を目指すべきとしている。「小さな政府」のことと思われます。

「小さな政府」は、19世紀の「自由放任主義」です。大恐慌以降、社会の大衆化・有権者の増大から福祉を求める声を無視できなくなり、ニューディール政策以降の「福祉主義」が「大きな政府」といわれます。

その後、サッチャー政権が財政難と公共事業・公共サービスの劣悪化のため、政府のサイズを縮小し民営化を実施しました。

また、レーガン政権が規制撤廃や公共サービスの見直しました。これが「新自由主義」による「小さな政府」といわれます。

「小さな政府」とは、産業や社会保障への国の関与をできるだけ少なくする、消極的で安上がりな政府です。したがって国民負担は低く抑えられます。また規制緩和されることで市場原理が働き、経済の活性化に寄与する。一方、貧富の差がはっきりしてきます。また社会保障が薄いために将来に対する「社会不安」が発生するといわれますが考えを伺います。



資料：17年 内閣府経済白書

A1

私の考える「小さくて優れた組織」とは、「小さな政府」とは必ずしも一致しません。現在の行政が担っている仕事の領域を、民間に対し全て無責任に任せるというものではありません。

これからの公共サービスは、必ずしも行政体が直営で、かつ排他的、独占的に供給するのではなく、効率的で質の高いサービスを維持するためにも、さまざまな担い手やプロセスの選択肢があり、民間において出来るものは民間に任せるという考え方です。しかし、セーフティネットなど、最低限の範囲は行政がしっかりと担っていくべきと考えます。

その目的は、厳しい財政状況があることは否定できませんが、一つは多様化するニーズに的確に、かつ効率良く公共サービスを提供することであります。もう一つは、日本の地域社会が助け合いの精神を取り戻し、人との繋がりを大切にした社会の構築であります。